
三国志放浪記～守成の才～

笑笑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国志放浪記〜守成の才〜

【Nコード】

N3068Z

【作者名】

笑笑

【あらすじ】

後漢王朝末期。

王朝は衰退し、各地の諸侯が次々と覇を唱え始めた乱世――後に三国時代と呼ばれた時代の幕開け。

そんな頃、つまらないことで袁家をクビになった元武将 王健。

いく当てもなければ、路銀もない。

そんな彼はこれからどうするのか。

序章（一）（前書き）

処女作です。

拙いと思いますが、よろしくお願ひします。

序章（一）

辿れば紀元前まで遡ることのできる中国史。その長い歴史の中で数多の英雄が凌ぎを削り、夢を果たし、あるいは半ばに散っていった。漢の劉邦に然り、唐の李淵に然りだ。

しかし、その多くの名場面を産んだ中国史の中でも後世―現代の日本人の心を掴んで離さぬ時代がある。それは他に類を見ぬほど多くの英雄が武を競い、智を競った時代。

ある者は己の信ずる覇道を歩み、ある者は義を唱え乱世を切り開き、またある者は臣との絆をもって乱世を駆け抜けた。

戦国乱世、暗黒の時代。

漢の治世は大いに乱れ、民達からの怨嗟の声は天をも揺るがす。民達は英雄の出現を渴望した。

その中で、続々と頭角を現す乙女達。

彼女達は熱く、激しく舞い踊り乱世を鮮やかに染め上げる。そしてその名を時代に刻む。後世となり、人はその時代を“三国時代”と呼んだ。

時は後漢末期。

十二月下旬のことであるから、麦の種蒔きも終わり、農家も一段落ついた頃である。

つまり、これから麦の収穫まで農民達の収入と食糧はたりなくなる期間であり、それを補う為に都市へと出稼ぎにきたのだらうものたちの姿が街角にポツポツと見られる。

彼等にとって職にありつけないということはそのまま自ら、引いては家族の死活へと直結している。

その為、顔には鬼気せまるものがある、城の修築などの普請の働き手を募っている一角は殺伐とした空気が漂っている。

こういった、太守などによる公共の事業にありつければ食と寝床の心配はなくなる上に僅かながら給金まで貰える。それが民にとってどれだけのことなのか今となって始めて痛切に感じられる。

そう思えば、臣下の立場からすれば迷惑極まりない袁紹様のあの浪費癖も民の立場からすればありがたいことなのかもしれない。

我先にと、新しい館の建設に名乗りをあげている人々の騒ぎを、少し離れたところから眺めて俺は深く溜息を吐いた。

河北省、冀州、南皮。

秦代より設置されたその地は現在、漢の名家、汝南袁家の嫡子である袁本初が治めている。後漢の時代、このように一郡を治める者のことを太守と呼んでいた。太守は中央、すなわち漢王朝から地方の統治を預かり、その地での収益を手にし、この頃では自らの軍まで持つようになり力を伸ばしていた。彼等は群雄、または諸侯と呼ばれその力は今や漢王朝ですら無視できないものとなっている。

もちろんここ南皮を治める袁紹も、その例外ではない。特に彼女の場合は実家が三代にわたり、三公を輩出している名家である為、その勢力は強大だ。

従って、その本拠地である南皮が栄えるのも自明の理である。街の中央へと続く大通りにはたくさんの人がごった返して活気に満ちている。

その活気を詳しく見てみると、それは懸命に職を求める人々であったり、彼等目的に商売をする商人のものだったりする。

そんな喧騒のなか一人、周りなどまるで無視したかのようにうつむき加減に歩き、絶望に満ちた黒い雰囲気醸し出す男がいた。

その男は着物に大口袴のようなものをはき、その上に寒さをしのぐ為に黒い外套を羽織っている。

下に着ている着物と袴はなかなか立派な品ではあるが、それらを隠す外套は、裾はボロボロで所々には破れを縫い直した跡が残っている。

そのせいで、一目見ただけでは纏う空気も影響し、限りなく怪しい人物に見えてしまう。

実際にすれ違った何人かはその異様な雰囲気圧倒されて道の端へと退いている。

その男の名は王健、字は史進。

つい先日まではこの街の太守、袁紹の下に低い地位ながらも将として名を連ねていた者だ。

しかし、些細な事で主君の怒りを買ってしまい暇を出されたのがちよつと三日前の事である。

すなわち、現在絶賛無職中である。

「はあ、これからどうしよう」

王健は肩を落としてもう一度、大きく溜息を吐いた。

ただ、袁家を解雇されただけ（十分な大事だが）ならここまで落ち込む事はなかった。

ならば、なぜここまで、廃人の如くとかしているのだろうか、

——（問題はその後の事なんだよな……）

袁家を出て行く際、同僚——私塾時代からの腐れ縁、から慰めか侮蔑なのかよくわからない言葉とともにいくらかの路銀を恵んでもらった。

何時も顔を合わせるたびに喧嘩していたような奴だった為、あまりに似つかわしくなくその時は大層驚いたが、ありがたいことには違い無いので感謝して受け取った。

その夜、取り敢えず新たな門出を景気付けるために街中のある酒家に入った——ここまでではよかったのだ。

その入った、王健は酒家の中で酒を飲んでいる内に酔った勢いで隣にいた男について自分の境遇を洩らしてしまった。どうやら自分でも知らない内に不満が溜まっていたらしく、かなりの熱弁だった。

男はその中のある一部を聞くと一瞬だけ思案顔になったかと思うと、それまでは酔った王健を心底迷惑そうにしていたのが嘘のように、急に親身になり慰めの言葉をかけ酒を勧めてきた。

（思えば、あそこから怪しかったよな）

そんな男を不思議に思いながらも、久し振りに話を聞いてもらったのが嬉しくて王健は言われるがままに酒を飲んだ。それこそ、浴びるように。

王健自身、格段に酒に強いわけではない。なのにそんなにも酒を飲めば、酔い潰れるのは当然で、そのまま泥のように寝てしまった。

その後の結果はもう分かるだろう。

朝になって、店主の声で起こされた王健の隣から男はいなくなり。懐に入れてあつたはずの路銀と替えの着物もなくなっていた。

解雇されたとはいえ、元太守に使っていた将ならそこそこの金を持つていると思われたのだろう。男にとって王健はまさに鴨が葱を背負ってきた姿に見えたのだろう。

（そういえば、あの男俺に酒を勧めた割には全然飲んでいなかったな）

とまあ、このように見事に騙された王健の手元には着ている服と腰につけた小刀しか残されていなかった。

だが、そのことをどれだけ悔やもうが盗られた金が返ってくるわけがない。だから、仕方ない、と割り切るべきなのだがそうにもいかない事態がその後に待っていた。

悲惨な事に金が無い事はそのまま宿が無い事を意味し、昨晚は街中で野宿をする羽目にもなったのだ。以前までは官舎の一部屋を借り

ていたが、解雇された時に当たり前だか追い出されている。

南皮は大陸の中でも北方に位置し、さらに十二月の夜の風は寒く、冷えた地面は容赦なく体温を奪い、昨晚、王健はもうすぐで死んだ両親と再会するところだった。

何とか一夜を乗り切ったとはいえこのままでは、本当に死ぬ。

そう考えた王健は今朝から本気となって仕事を探しているのだが、昼下がりとなった今でも見つかってない。

正確には、最初にも述べた、袁紹様の館の建設のための人足の募集があつたのだが、その募集をする役人たちの中に会いたくない人物――かつての直属の上司の姿があつた為に申し出ることができなかった。

いくらなんでも情けなさすぎる。特に近しかった人には知られたく無いと思うと王健はどうも恥を捨てきれなかった。

今夜の野宿は何としても避けないといけない、多分だが体力がもうもたないと感じている。

（何とかしないと、流石にもたん）

王健はあれやこれやと歩きながら考える。

（文若の所へ行つて、もう一度路銀を貰うか？
いや、無理だ。

あいつがそんなに優しいわけがないし、いくらなんでも俺の吟持の問題がある。

何処かで商隊の護衛でもするか？

いや、今の時期じゃ商隊だって少ないしすぐに見つかるわけがない
とりとめもない案はただ、頭の中を逡巡するだけで現状は何もかわ
りはしない。ちなみに今の考えの中にでてきた文若とは、共に同じ
私塾で学び、袁紹の下でも一緒に使っていた同僚のことだ。王健自
身、そいつは自分より遥かに優秀だと認めているし、実際に袁紹軍
の中でもなかなか重要な役職についている。官庁を出る際、路銀を
くれ、見送りに来た数少ない知り合いの一人のことだ。

一人でブツブツ言いながら時折、頭を横に振る王健には周りから更
なる注目を集めたが、それを気にするだけの余裕はもう無かった。

日が西へと沈み、天文台にいる天文官が夕刻の鐘を鳴らす。

この時代は時間に対する感覚は非常に曖昧模糊としている。
権力者達の中には、原始的ではあるが水時計と呼ばれるものを持つ

ている者もあり、一概には言えないが、殆どの人々にとって時間を
知る手段と言え、この鐘の音だけである。

一般の民達は、夜明けの鐘と共に起き、正午の鐘で昼食を取り、そ
して夕刻の鐘で仕事を終えて家へ帰る。

これが庶民にとっての当たり前の生活であり、鐘が鳴ったのを聞いた人々は各々の仕事を切り上げ帰宅をはじめ、街道の両脇にある、店達もそれにあわせたように徐々に営業を終える。

――さあ、こんな時、帰る家をもたぬ者は何をすれば良いのだろうか

あの後も職を求めて街中を彷徨った王健であったが、結局成果はあ
がらず事態は何も好転していない。
いや、それどころか寧ろ悪化している。

街の活気が急速に収縮している今となつては職を探すことなどこれ
まで以上に厳しい――いや、不可能と言つても過言ではない。

つまりいよいよ、極寒の中での野宿が現実味を帯びてきてしまった
わけだ。

（自分のことながら本当に情けない、こんな予定じゃ無かつたんだ
けどな）

王健は当初の予定では、南皮の街をでて他の街、陳留なり洛陽なり

へと行きそこで仕官をして軍に入る考えであった。

まあ、少なくとも一般人よりは腕は立つし、少し前に起こり、なお激しい黄巾の乱の為に今は何処でも兵士の募集を行っているはずであるからそれは容易だと考えたのである。

しかし、それはもはや叶わない。

路銀もなしに旅に出るなど、筏で太平洋を横断しようとするようなものだ。

碌な交通のインフラがなく、だだっ広いこの国を旅するのは簡単では無いのだ。

王健は自分の惨めさを改めて実感すると、今日だけで何度目になるかわからない溜息を吐いた。

吐き出された白い吐息は少しの間口の前に留まった後、北からの風にふかれ八方へと霧散した。

さらに日が沈む。茜色に染まっていた街は徐々に色あせていき、深い闇が街を包み始めた。

辺りは一層暗くなり、あれだけいた人々も今では周りを見渡しても数えるだけしか確認できない。

その静かな街中を王健は未だに歩いていた。勿論、何かあてがあるわけではない。

（これ以上は是非も無い。明日になったら、文若の所へ行こう。死ぬ気で嘆願すれば少しくらいは……………大丈夫だろう。）

この状況になったことで漸く、昼間までは持っていた矮小な自尊心も霧散して、男としても人としても情けない決断をすることができた。

あの毒舌猫耳に頼るのは癪ではあるが、もはや背に腹は変えられない。

そんな風に決意を固めた時、

「ん？」

王健が振り返ると、城の方からこちらに向かって全力で走ってくる小柄な少女が見えた。必死の形相の少女はなにやら後ろを確認しながら走っており、その目線の先には手に松明と槍や剣といった武器を持つ男達が怒声をあげながら追いかけているのが見えた。

「ちょ！どつ、どいて、どいてどいて」

こんな時間である為に道路には誰もいないとたかを括っていたのだろう。少女は後ろの男達から視線をはずし、前を向き直して王健と目があつた。

突然、目の前に人がいたことに驚いた少女はわめきながら慌てて避けようとする。

「うおっ！」

だが、少女は避けようとした際に足をもつれさせ、体勢を崩して見事につんのめった。このままでは地面と激しく接吻するところであったが、幸いなことにあまりの出来事に呆けていた王健の胸に顔面を突っ込んだことでなんとかその事態は避けられた。

「おい、大丈夫か？」

少女が激突した衝撃で我に返った王健は少女の肩を持って立たせると、とりあえず声をかけた。

「な、何が大丈夫か？だ。これくらい避けるよ。この、のろまー！」

「は？」

「だから、私が退けって言っただろ、さっきさ！なのに、どうしてどかないんだよ！？」

「……何故に俺が責められるのかが理解できんのだが」

「てめえ！？」

胸から顔をあげた少女は怒りの為に上気した顔で、王健を睨みつけた。頭二つほど王健より小さな少女であるが少女は全く怖気ついていない。

むしろ、不幸続きのせいで意気消沈の王健よりも、よほど覇気に満ちていて迫力がある。

「動くな、貴様達！」

王健と少女が睨み合っているとーというより、正確には少女が一方的に睨みつけている所に追いついてきた男達が、二人を取り囲んで槍や剣を突きつけた。

「やばっ！！」

自分の立場を思い出した少女は、額に冷や汗をかきながら辺りを見渡した。

そして、王健と目があつた所で少女の動きが止まった。

(何か、やばい気がー！)

王健は本能的になんらかの危機を察知し言葉を出そうとする。しかし、それよりも早く少女の口元が釣り上がる。

「こっ、こいつに！　こいつにやれって言われたんだ」

「あ？　お前は何を…」

「こいつが私を脅して、命令したんだよ」

少女は王健を指差しながら、周りの男達に説明を始めた。もちろん、王健は少女と一切の面識はない。正真正銘の赤の他人である。

「ちょっと待て。話がまったく見えてこないのだが。」

「よく言うよ。剣まで突きつけて脅したのはあんただろ?!」

少女はありもしないことをつらつらと述べていく。なんとかこの少女を黙らせようとするが少女の口は止まらない。

「なあ、これ剣だろ?折角いいモノもってんだから使えって」

少女がそういつて剣に手をかけた時、今まで黙っていた周りの男達
が反応する。

「貴様ら、抵抗する気か?!」

男はそう言うと同時に一歩前にでて二人に向かって槍を突き出した。

「違うって!!」

ひとまず目の前の少女を黙らせるのを諦めて、王健はこちらに伸びてきた槍の穂先を左手でうち払った。同時に右足の前蹴りで男のみぞおちを蹴り上げた。

「かつ、はっ…お」

男は苦しそうに呻きをもらして前のめりにつづくまる。それを見た残りの男達はいっせいに色めき立った。

「貴様、我らが袁紹様直属の親衛隊だと知っての狼藉か!」

「この、盗人風情が!」

つい咄嗟に足を出してしまい男を昏倒させた王健に男達は罵声をぶ

つける。

この程度の罵声でおじけるような王健ではないが、男の言葉に含まれたある一言のお陰で追撃にでようとしていた足が止まる。後者の“盗人”という言葉ではないーそれはなんとなく理解していた。問題だったのはその前だ。

「袁紹様、直属?! いや、そんなの全く知らない。知ってたから襲わなねえよ!!」

おい、お前! いったい何をしたんだよ?」

袁紹様直属。この言葉が意味するのは文字通り、袁紹ーこの街の太守の軍の兵士、ということである。そして、太守の軍の兵士に攻撃をしたということは太守自身に叛逆したことに等しい。この街の支配者たる太守に背いたのなら軽い処罰では済まない。よくても徒刑、それどころか死刑だってありうる。そこまで考えた王健はすぐに否定の意志を示し、元凶となった少女へと問いかけた。

「なに言ってるんだよ? あんたが“太守様の宝物庫に盗みに入れ”って指示したんじゃないか」

そして返ってきた言葉は予想の斜め上をいく。どうやらこの少女は本気で王健を巻き込むつもりらしい。王健は顔色一つ変えずに堂々と嘘をのたまう少女に

激しい憤怒とその手腕に一種の畏敬の念を抱く。しかし当事者の王健だからこの少女の嘘がわかるのだが、周りのもの達がそれに気付くのは難しい。

王健達を取り囲む男も然りだ。

「この、少女を騙して利用する小悪党め!!」

そういつて男の中の一人は王健に向かい槍を突き出した。王健はその槍を右へ打ち払うと後ろに飛んで少し距離をとった。

「だから、なんでそうなるんだよ？」

どうやら男達はすっかりと少女の毒牙にかかってしまったらしく、狙いを王健にかえて襲ってきた。王健はなんとかその誤解を解こうとするが怒りで血が上った頭では考えたことの半分も言えない。故にただ、頑なに否定を続けることしかできなかった。無論そんな言葉は兵士達が信じるわけもない。

そのうえ、背中少女は兵士達に顔を見せないようにしながらクスクス笑っているのがわかるので王健の怒りはどんどん加速していく。その間も兵士達は槍や剣で王健へと襲いかかる。

こうなつては最早、誤解を解くことは能わず。王健にはこの状況を打破する方法は残されていない。

どうしようもなくなった王健は、

(……………もう、知らね！)

――振っ切れた。

王健はやけくそになり、ここ最近の不幸に対する怒りも込めて、目の前の男の顎へと右脚で蹴りをいれ意識を刈りとる。

そして、そのまま残りの兵士達の方にも足を向けていった。

このあとのことなど、全く考えることなく……………。

序章（一）（後書き）

誤字報告あれば、是非お願いします。

序章（二）

――序章――

後悔先に立たず。
後の祭り。

先人達の残した言葉がここまで痛く心に染みたのは初めてかもしれない。先程までの怒りも少し落ち着きを取り戻してきた。

時刻は既に夜といってもいい頃。そんなことを思いつつ、王健は足元に倒れる三人の兵士達を見下ろし、もう一度深くため息をついた。

あの後、二人目を気絶させた所で無傷の兵士は五人いた。そしてまずはその中の一人、王健の左側にいた兵士が真っ直ぐに切りかかってきた。剣筋はいたって単調。

王健は振り下ろされた剣を左にずれて避けると、そのままの勢いで自分の隣を過ぎていく兵士の後頭部に左回し蹴りをいれた。体勢を崩されたうえに、回し蹴りをくらった男は地面に頭を強く打つと動かなくなつた。

この時点で残りは四人、地面に伏せたのは三人となる。かたや王健は息を乱れた様子もなく、戦意も衰えていない。

これを見た残りの男達は、いったい何を思ったか。

自分達はまだ四人もいると考えたか、或いは、もう四人しかいないと考えたのか。

その後、男達は完全に動きを止めて互いに顔を見合わせて、一目散に逃げ出したことからおのずと答えはでてくるだろう。

と、思いの外、簡単に終わることが出来たのだが、袁紹軍の兵士を殴つたことにかわりない。

つまりこれで明日、文若の所へ行くことも自動的に不可能になつてしまった。それどころか悪ければこの街で普通には暮らせないかもしれない。

状況は更に悪いこととなり、万策尽きたり。

本当にどうしようもなくなつた王健だが、まずすべき事は、こんなことをしてくれた少女を問い詰めることだ。と王健は少し後ろにいる元凶の少女へと目を向けた。

「お前さ、あれだけのことをしてくれてよく逃げないでいれるな」
どいういう訳か、王健が戦っている間に逃げることも出来たはずなのに少女は最初の位置から少しも動かずにいた。

しかも、満面の笑みを浮かべて。

「ーあはっ！」

そして、耐えきれなかったかのように今度は大口を開けて笑い始めたのだ。

当然、王健には何が起こったのか全く理解できない。

それに、王健は少女のせいで大変な目にあわされた直後の為、そんな姿を見せられると、一度収まった怒りが沸沸とわいてくる。

「一人で大口を開けてわらってん場合か！ お前のせいで俺はとんでもないことになったんだぞ」

王健が刺々しく少女に怒鳴っても、少女は笑うのをやめない。
流石にこれ以上は我慢の限界だ、と王健が思ったところで少女はようやく笑いをやめて口をひらいた。

「いやあ、ごめん。本当は囿にして逃げるつもりだったんだけど、兄さんが思ったより強かったから助かったよ」

笑いすぎて涙目になった目をこすりながら少女はなんら悪びれることもなく言い放った。

聞きようによつてはとんでもない内容だが、にひひ、と笑いながら言う少女はなんとも嬉しそうであるので、それを見たら怒ろうとした王健の氣勢もそがれてしまふ。

「笑いごとじゃないぞ」

王健は呆れながら、ため息を吐く。少女にとって面白い事でも、王健からすればちっとも面白くない。

「だから、ごめんつて。でも、そんな事よりさー」

少女は小走りに近付きながら、いったん言葉を切る。

「兄さんつてさ、お金持つてないよね？」

王健の今の格好は、かなり怪しい。それにこんな時間に当てもなくフラフラとしていた事からそう思われるのは仕方がない。金があるならとつくに宿に入っている時間だ。

「……人をみかけで判断するなよ」

だから、少女の言葉は正しいのだが明らかに“はい”と応えるのに抵抗を覚えた王健は否定でも肯定でもなくそんな言葉を口にした。

「じゃあ、お金持つてるの？」

「いや、そういう話じゃなくてだな……………」

少女は更に痛い所をついてきた。王健はちっばけな見栄の為にもう一度話をずらそうとするが、このままだと平行線を辿りそうだと考えると言葉を止めた。

「……………まあ、確かに金もなければ、家もないけどさ」

改めて自分の状況を口にする、開き直ったはずなのに情けなさがひしひしと感じられて王健は少し少女から視線を外した。

「あはつ。やっぱり？　　なら、もう決まりだね。ちよっとついてきてよ」

少女はそういつてから、手招くような動作をして、王健に背を向けて歩き出した。

「なにが、決まりだ。　　俺にはいったいなんの事がさっぱりわからんぞ」

「助けてくれたお礼に住み込みのいい仕事紹介してあげからさ！」

抗議する王健に対して、少女はこちらに顔を向ける事もせず、とんでも無い事を言ってみせる。

曰く、住み込みの仕事をくれる、と。

……………？

「マジで？」

あまりにも突然に舞い込んだ幸運に、呆然として固まっていた王健は素っ頓狂な声を出す。それと同時に少女の言葉の意味を理解した。あれほど苦労した仕事探しがこんな形で解決するなど、夢にも思っていないかった。

王健は皮肉な事に自分に最大の不幸を持ってきた少女が、最大の幸運を持ってきた事に少し複雑な気持ちを抱く。だが、今、目の前に吊るされた餌はそんな事がどうでも良く思えるほど魅力的なのだ。

「おい、ちよつと待ってくれ！」

王健は早足で歩いていく前の少女を見失わないように駆け足で追いかけ始めた。

この頃になると先程までの怒りは全て霧散していた。

「おい、本当にここなのか？」

少女に連れられて、歩くこと幾ばく。今、王健達は街の大通りから外れた所にある裏路地にある一軒の酒屋の前に立っている。

店の入り口に掲げられた看板は“酒”の一字のみ。いったって単

純なのだが、客を呼ぼうという気はなさそうな看板だ。

「うん、ここであってるよ。まあ、確かに汚い店だけど入ってよ」
少女はそう言っただけ扉を開けると、王健の手を引きながら店の中へと入っていった。疑わしくはあるが、王健も特に抵抗することもなくそれに続く。

「ただいま！！ 元昭さん、今帰ったよ」

店内は結構な数の客がいて、騒然としており、その中でも聞こえるようにと少女は声を張り上げるようにして叫んだ。

その少女の言葉に応えるようにして厨房に立っていた男性が大儀そうにこちらを向く。

元昭と呼ばれたその男は、一言でいうならば怪しかった。ところどころが擦り切れたボロい着物をきている為でもあるが、それよりも、彼の目がその印象をつくっていた。

彼の目は生気を失い、澱んでいる。そのうえ少女を見た後、王健を見つけると堂々と値ぶむかのようにじろじろと目を小刻みに動かしてきた。

「ー好きにはなれそうにない。」

それが彼を最初に見た時に王健が感じた印象である。

「今日はずいぶんと遅かったな。で、そいつは誰なんだ？」

「うん、紹介するよ。この兄さんは……あれ？ 兄さんってな

んて名前だっけ？」

元昭は一通り舐め回すように見た後、ようやく口をひらいた。

その元昭の問いに答えようとした所で、ようやく少女は自分が連れてきた男——王健の名前を知らない、ということに気が付き、名前を尋ねた。

「そういえばいつてなかったな。 王史進だ。あと、お前の名前はなんていうんだ？」

「私は周倉だよ。字はないから周倉ってよんでくれればいいよ」

この時代、名前には姓と名、そして字というものがあつた。大抵、初対面やあまり仲の良くない間柄では姓と字を用いて名乗る。名を呼ぶというのは余程の仲でなければ無礼となるのだ。

とはいえ、更にその上に存在するものも存在する。それが“真名”と呼ばれるものだ。これは、その者が本当に心を許した者にのみ呼ぶことを許す名前だ。

真名を許すということは命を預けるに等しい、とも言えるぐらい重みを持つ。

だから、真名を許すことなど滅多にあることじゃない。実際、王健が真名を許された人物など片手で足りるほどしかない。

「あつ、それとこつちのおじさんは、裴元昭さん」

「……裴元昭だ。元昭と読んでくれればいい」

少女はそのまま後ろへ手を向けると、男の紹介をする。紹介をされた男――裴元昭はぶっきらぼうに紹介をする。

「それで周倉。どうしてこの王史進殿はここにきているんだ？」

「そうだった！ねえ、元昭さん。」

この兄さんだけど、うちで雇えないかな？」

ここになってようやく思い出したように周倉は本題を切り出した。周倉が少し後ろめたそうに言っているのが不安ではあるが、王健にとっては一番重要な話題へと変わった為に、自然と裴元昭の口元へと集中する。

「雇うって……お前なあうちの店がおいそれと人を雇う余裕が無いことぐらいわかってるだろう？」

「それぐらいわかってるよ。でもさ、一人くらい大丈夫だろ？」

「まあ、一人くらいなら大丈夫だが……。そもそも、お前はどこでその人とあつたんだ？」

「それは……」

元昭そう尋ねられた周倉は少し気まずそうな顔をしてから、少しずつ出会った経緯について説明し始めた。

その内容は、

――袁紹の城の宝物庫に忍び込んで衛兵に見つかり、追いかけられていた所を助けてもらった。――周倉の話 요약するとこうなる。

王健は既に知っていることであるので改めて驚くことはない。しかし、初めて聞く元昭は話を聞くうちに驚き、というよりも呆れた表情になり溜息を吐いた。

「お前、また盗みに入ったのか？」

「いや、つい」

「つい、じゃすまんぞ。あれだけ目立つ行動はするなど言ったはずだろ」

呆れたように言う元昭に、頭の後ろに手を当てて笑いながら周倉は軽く返す。しかし、自分の非をみとめているのか、そのあとはどこか伏せ目がちになった。

それを見た元昭はどこか諦めたように小さく弦やく。

「大体の事情は理解した。周倉が迷惑をかけたようで、本当に申し訳ない」

そして、いったん視線を周倉から外し、後ろで二人の話を黙って聞いていた王健の方へ顔を向けると軽く頭を下げる。

「いやいや、悪いのは周倉だけですからか、元昭さんが謝る必要はありませんよ」

頭を下げられたことに驚きつつ、王健は否定する。実際、全ての原因は周倉にあるのだから元昭に責任はない。王健の視界の隅では、周倉が不服そうにしているのが見えるがそんなものを気にするつもりはない。

この裴元昭も周倉から説明を聞いたあとから、最初にあつた怪しむような目はなくっており、幾らか警戒心を解いてくれたように見える。周倉に接する態度も鬱陶しさは欠片もなく、意外に世話焼きそのうでもありそうだ。

どうやら、最初の印象とは違ったようだ、とそれを見た王健は元昭に対する印象を新たにした。

「そういつてもらえるところからも助かる」

元昭はそういつて、周倉の方を軽く見てから苦笑いを浮かべた。

「それと、お詫びといつてはなんだが、周倉が言つようにここで働いていけないか？」

周倉から金に困つているとも聞いた。あまり充分な給金は出せないが、まあ、最低限の衣食住の保障はする。悪い話ではないと思うが、どうだい？」

「いいんですか！是非、それはもう是非お願いします！」

そして、そのまま元昭は王健を仕事に誘い、王健はそれに一も二もなく飛び付いた。元々それが目当てでここに来たのであり、断る理由などどこにもなかった。

それどころか衣食住の保障までしてくれるとなれば尚更だ。

「こつちもちようど腕が立つ人を探していたんだ。ほら、見ての通りこんな店だから、来る客に口クでも無い奴も多くてな。」

いざござもしよつちゆう起こるから、それを抑えられる人がいてくれればこつちも助かる。

あんだ、それなりに腕は立つんだろ？」

確かに落ち着いて店をみて見ると裏路地にある為か、ごろつきのよ
うな感じの悪い客も多く見られる。

彼等はいかにも怪しい格好をしており、中には腰に剣をつけている
者までいる。

要するに、元昭は店にいる扱いに困っていたごろつき達の処理を王
健にまかせたのだ。

「そんなに腕が立つわけじゃないですが……。できる限りやらせて
もらいます」

王健は少し面倒くさいことをおしつけられたと感じながらも、それ
以上の利があるため、控えめにだが了解の意を返す。

「よし！じゃあ、兄さんのことも決まったし、今夜は飲もうよ！」

先程から少し気まずそうにしていた周倉であったが、王健の就職が
決まると、急に手を叩き、何処からか持ってきた酒を盃に注ぎ始め
た。

「おい！周倉、勝手に店の商品を開けるな！」

「いいじゃん、せつかくの兄さんの門出なわけだし、ペアという
よ！はい、兄さん」

そういつて酒のつがれた盃を王健に差し出してきた。だが、それを見た王健の心に真つ先に浮かんできたのは三日前の惨事。あの時もこんな風に盃をすすめられたのだ。

「いや最近、酒にはちよつといやな思い出があったから、遠慮しくよ」

「なになに？私のくんだ酒は飲めないって言うの？」

既視感から遠慮した王健だったが、周倉は酔っ払っていないはずなのに、酔っぱらいのような言葉で酒を更にすすめてきた。

「……まあ、一杯だけならいいか」

そこまですすめられては断る方が大変だ。だから、王健は一杯だけと断りを入れたから盃を受け取った。

それを見た少女は満足そうに笑うと自分の分の盃にも酒をついで上へと掲げる。

元昭は周倉が門出と言ったのを聞いたあとに、笑い、俺は仕事に戻るわ、と言い残していつてしまいここにはいま、王健と周倉の二人しかない。

だから、周倉の相手をできるのは王健しかないのだ。王健はそれを読み取って周倉に合わせて盃を掲げる。

「じゃあ、兄さんを祝して……乾杯」

王健が盃を掲げたのを確認したら、周倉はそういつて盃を煽り、王

健もそれに合わせた。

（なんか、色々あったがこれはこれで悪くはないか……）

王健はそんなことを考えながら、盃の中の安物のまずい酒を飲みほした。

とりあえずはここで暮らすことを決意して……。

序章(二)(後書き)

誤字報告、アドバイスなどがあれば是非お願いします。

序章(三)(前書き)

ようやく原作キャラ登場。

多分、予想通りの人だと思います。

序章(三)

「これで俺の勝ちだな」

王健は槍兵を敵本陣へと進めると、にやりと笑いながら相手に己の勝利を告げる。

敵の槍兵はこちらの弓兵の横撃を受けて壊滅状態。もはや本陣を守る敵の部隊は残っておらず誰の目からも勝敗は明らかだ。

「あんたも結構ねばった方だと思うが、ここまでだな」

王健は目の前で強く拳を握りしめ、あれやこれやと悪足掻きの手を考えているであろう男に対して、もう一度勝利を宣言した。

「くっ、くそ!! 覚えてやがれ!」

わなわなと震えていた男は、盤面の上に金を叩きつけて立ち上がり、捨て台詞とともに走り去っていった。

「まいど。また来いよ」

王健はそんな男を笑いながら、男の残していった金を懐にしまった。そして、そのまま盤上に残った駒を片付ける。それが終わったところで王健は周りに目をむける。

「じゃあ、次の人いる？」

王健がそういつて声をかけると、周りにいた群衆急にはいろめき立ち、俺が先だ、と順番を競いはじめた。

どうやら今日は繁盛みたいだ、王健はそう思うと自然と笑みがこぼれてきた。

――序章（三）――

時刻は昼の少し前頃。

王健がここ、元昭の酒場でお世話になりはじめてからもうすぐで半年がたつ。

その間に冬は過ぎ、春も終わってしまった。そして今は夏の真っ盛り。盛夏となれば北方とはいえ、南皮の街も必然的に暑くなる。

特に今日のような晴れた日は一段と暑さもまして、着ている着物が汗で何度も肌に張り付くのでさっきから定期的に襟元をバタつかせて汗を飛ばしている。

しかし、そんな努力を嘲笑うかのように、暑さは休まるところを知らないのかどんどん暑くなる。

夏だから仕方ないのだがこうも暑くてはやっていられない、と王健は思いつつ、前にある盤を見る。

王健が先程からやっているこの遊戯は軍将棋と呼ばれるものだ。

昔、私塾に通っていた頃熱中した覚えのあるそれをこの酒屋で見つけた時は驚いた。店の端の方で人ばかりになっっているのが気になっ
て中を覗くと二人の男達が軍将棋をしていたのだ。無論、ただ木を
削りだして作ったものであるので粗末なのだが、王健の記憶にある
それとは仔細変わらないものだった。

見つけた時は懐かしさを覚え、参加させてもらったのだから、この酒
屋の軍将棋は王健の知っているそれとは大きく違う部分があった。

――ただ一点、金銭を賭けるということだ。

金を賭ける、というと違法のようにも聞こえるが、この時代にそんなことをわざわざ取り締まる為の法律などあるわけがないので、特に問題とする者はいない。

むしろごろつき等が集まるこの酒場ではこういった賭けに乗り気な者の方が多くなかなか盛んに行われている。

郷に入らば、郷に従え。

王健も初めて参加した時から、この決まりに基づいて、金銭を賭けた。

そしてその結果は、王健の全戦全勝。

もともと、私塾にまで通いそれなりに軍略を学び、武将としても働いたことのある王健とそこら辺のごろつき等では勝負になるわけが

無いのだ。そして王健は大いに儲けさせてもらった。

こんなことは彼等からすれば面白くない。だから、本来なら王健のような存在は賭けの場からは忌避されるのだが、彼等は生来の負けず嫌いが多かった。その為、王健という絶対に超えられない壁を前にしても、なんとかして超えようと戦略を練っては何度も挑んできた。

その度に返り討ちにあっても彼等は諦めず、何度も挑む。

その結果として王健は自信ある者の腕試し相手、という立場になり忌避されることもなく受け入れられた。

王健自身も金を儲けるいい機会の為、彼等の挑戦を拒む理由などない。

だから、今日のように挑戦者の多い日は王健にとって大歓迎なのだ。

「俺の勝ち、だな」

「っ、まだだ。まだ、こっちは左翼が残ってる!」

「確かに左翼は比較的は無事だが、あんたの本陣はもうボロボロだ。勝ち目が無いことくらいあんたならわかるだろう?」

「っ！くそ!」

また一人、負けた男が机に賭けた金を叩きつける。

今日はこれで三人目、金額にすると二週間は食事代に困りそうに無いくらいだ。これはいつもからしたら随分と多い。

暇潰しの為に参加したこの遊びだが、今では王健にとっては貴重な稼ぎ口になっている。

「兄さん、今日は儲かっているね」

王健の後ろに控える少女――周倉が嬉しそうに声をあげる。

「ああ、儲かり過ぎて怖いくらいだ。でも、今日はこれくらいにしておくか」

王健は周倉の方を向いて笑顔で返す。

前にも書いたが、王健はここにくる客と比べれば将棋の腕は格段に強い。そんな王健があまりにも長く盤を占領しては周りの客も面白くない。

たがら、王健は自分に挑みたがる客に呼ばれる以外では極力参加しないようにしている。

「え〜。もうちょっとやればいいじゃん」

「そうは言ってもな……見た感じ俺に挑みそうな客はもういないし、ここらが潮時だ」

切り上げようとする王健に対し、周倉は不満気に声をあげる。しかし、ここは気を使はねばならない所であるので構わずに王健は周りの客に、一言述べてから立ち去った。

「また、いい勝負を見せてくれよ」

「次こそは勝ってやるから、首を洗って待ってるよ」

常連客たちの声を背に受け、王健は片手をひらひらと振りながら、了解と返事をする。

「ほら、そろそろ仕事に戻るぞ」

「はい」

王健は戻る途中、周倉の肩を叩き、仕事に戻るように促すと、周倉は不満そうにだが、それに従って王健の後ろに続いた。

この時王健も周倉も、もう一度ここで勝負をすることになるとは知るはずがなかった。

そう、急な来訪者が来ることなどこの時は想像もしていなかったのだ。

――――
先程、王健が将棋をしていた頃から何刻も経ち、時刻は夕暮れ時。日は既に沈み、外は夏とはいえ随分と暗くなった。

仕事終わりに、安い酒を求めて飲みに来る客の為にこの店が一番混雑する時間だ。

この店の酒は、お世辞にもうまいとは言えないが兎に角、安い。普通の大衆向けの店よりも安い。

その為、それなりの客が集まり、店員である王健たちの仕事も多くなる。

「兄さん、この盃すぐに洗っておいて！」

「了解。そっちに積んである盃はもう洗い済みだから持って行ってくれ」

使用済みの盃を両手一杯に持ってきた周倉に、王健は盃を洗う手を休めずに応える。次々と洗わないといけない盃が送られてきて少しも休む暇など無い。

季節がどんどん暑くなるにつれて客は増え、今は盛夏であるから喉の乾きを潤そうとする客が多いので厨房の方も大忙しだ。

勿論、厨房と言ってもなにか料理を作っているわけではない、この店ではみな、話や将棋の勝負をツマミとして只、酒を飲むのだ。だから、普通の酒屋に比べれば忙しくないはずだが、忙しい。

その明確な理由は、店員の少なさ。

この店で働いているのは、元昭と周倉、そして王健の三人だけである。

なぜ、もっと人を雇わないかと尋ねた時に聞いた答えは至極、納得のいくものだったので文句を言うつもりがないが、せめてもう一人くらいは欲しい、とは王健の密かな思いである。

でも、三人だけでも店は回せているから大丈夫か、と考える王健は用心棒として雇われた事など既に忘れかけていたりする。

そして、王健は着物の袖を捲りあげ、気合を入れると、周倉の持ってきた盃の山から一枚を掴み、使い古されたボロ布で磨きはじめた。

そして、暫くが経ち、注文が落ち着いたのだらう送られてくる盃が少しになり、遂には全て洗い終わった。

おそらくもう洗わなくても今ある盃だけで足りるだらう、と考えた王健は洗うのに使っていた大きな桶に入った水を捨て、簡単に手を洗う。

そして王健が、店内の掃除でもしようか、と立ち上がった時。

「史進！手が空いたなら奥の倉庫から酒を持ってきてくれ！！」

厨房の方から顔を出した元昭が仕事を頼んできた。

「わかりました。一箱持ってこればいいですか？」

王健がそういつと厨房から、おう頼む、と声が聞こえてきたので、王健はそのまま奥の倉庫へと向かった。

倉庫といっても、地面を少し掘り下げた穴に酒の入った箱があるだけなのだが、王健はそこから一箱を持ち、少し駆け足気味で元昭のところへと運んだ。

「元昭さん、持ってきました」

「悪いな、そこに置いておいてくれ」

王健は厨房に入り、元昭に言われた場所に箱を置く。

そして、今度こそ掃除をしようと厨房を出ようとした。

「なんだと、てめえ」

そんな時、客たちの方から罵声が聞こえてきた。大方、何処かで喧嘩でも怒ったのだろう。みると、どうやら罵声は軍将棋をしている所から響いてきたようだ。

王健は半ば呆れたように、元昭に目を向ける。

それに対して、元昭も呆れたような目で騒ぎの方を一度見てから、王健に目を向けて「頼む」と小さく弦やいた。

「了解です。これも仕事ですから……」

王健は面倒くさそうに騒ぎの方へと向かっていった。

「誰が雑魚だつて?! もういつペン言ってみろ!」

王健が軍将棋の所へつくとそこには、今にも飛びかかりそうな剣幕で叫ぶ男と、その対面には目深く外套をかぶり、俯き気味の為に男か女かよくわからないが、小柄な子供? が座っていた。

状況はよく分からないが、とりあえずは怒っている男をどうにかしないといけないので、王健は今も怒っている男へと近づいていった。

「まあまあ、他にも大勢の客がいるんだから落ち着いて」

「おお、あんたか。だけど、こいつが俺の事を雑魚、って言いやがったんだ」

王健が、男の肩をつかみ、宥めるように話すと男は意外にも落ち着いて返してきた。

盤面を見てみると、なるほど男の軍は包囲を受け、完膚なきまでに叩き潰されていた。

どうやら、この男は前にいる子供に惨敗をして、子供がいった言葉に過剰に反応してしまっているのだろう。

「まあ、相手は子供なんだ。そう目くじらたてて怒ったて仕方ないですよ」

王健はもう一度男を宥めるように言った。

その途中で一瞬、前の子供？から凄まじい殺気がきたような気がするが気のせいだろう。

「そうだけだよ……。そつだ、俺の代わりにあんたがこいつと勝負してくれよ。こいつの鼻をあかしてやってくれ！」

王健の言葉に納得したのか、反論しなくなった男は、その次に前の

子供？と勝負しろ、と提案してきた。

「いやいや、そんなことできるわけ……………」

「いいよ、やる」

驚いた事に王健がその提案を却下するよりも早く、前の子供が勝負を了解した。

だが、いくら本人がいいと言っても王健には仕事がある。そう思い、王健は元昭の方をみる。

「構わん、本人がいいならやってやれ」

どうやら元昭も話を聞いていたようで、勝負の許可をしてきた。こうなった以上は王健に断る理由はない。

「はあ、分かりました。一回だけですよ」

「おお、頼むよ。へっ、こいつは無茶苦茶つええからなお前なんて瞬殺だ」

男は喜んだあと、子供にむかっていかにも小者らしい言葉をはいた。その言葉に対して、子供は一つも反応する事なくただ、駒を元に戻している。

その手際は随分と慣れており、なかなかの強者であるのが分かる。さっきの勝負とあわせてみると久し振りに面白い戦いができるかもしれない、と王健は嫌々そうにしながらも、微かな期待を持ち、席についた。

「賭け金だが、今回はなしでいいよな？」

流石の王健も、子供から金を巻き上げる気は無いので、今回は賭け金無しでの勝負を提案する。

「銀十匁」

「はっ？」

「こっちは銀十匁を賭ける」

しかし、この子供は王健の予想のはるか上をいく返事返してきた。

王健の聞き間違えでなければ、この子供は、銀十匁を賭ける、と言った。いや、二回も言ったのだから聞き間違えではないのだが。

この時代、銀一匁でもあれば当分は金に苦労せず暮らせる。だから、銀十匁と言うと庶民にとっては莫大な金である。

その莫大な金額を前にして、周りの客は驚きとともに、一斉に騒ぎ始めた。

「銀十匁?! 本当に良いのか？」

王健がもう一度確認をすると、前の子供は黙って頷いた。

銀十匁、もしそれが手に入ればかなりの儲けになる。しかし、危険が無いわけではない。ここの決まりで王健は負けた時、相手が賭けた金額の三倍を払わないといけないのだ。

それくらい利益がないと、王健に挑む人は少なかったので、そう

いった規則になったのだが、もしこれで王健が負ければ三十匁の銀を払わないといけない。無論、そんな銀を王健が持っているわけがない。

それを考えると、少し躊躇われるが銀十匁は非常に魅力的でもある。それだけあれば、元昭に日頃の御礼もできるし、周倉を街へ買い物に連れていく事もできる。

しかも、相手がいくら強いと言っても所詮はこんな酒屋に来る者、負けのない自信が王健にはある。しかし、さっき話した声に何処かに聞き覚えがあるように王健は感じたが、そんな事は些細な事だろう。

「本当に良いんだな？」

王健の再三の確認にも頷き、了解の意を示してくる。ここまで確認にもしたのだから大丈夫だろうと思った王健はようやく腹を括った。

「分かった、なら賭け金は銀十匁だな。手番はそっちから始めるか」

王健がそう言うと、周りはさらに盛り上がる。

銀十匁の勝負などこれまでに一回でもあったはずがないから当然である。

そして、先手である、前の子供？は俯き気味の頭を小刻みに揺らすと、

「クツクツクツ、あつゝはっは。

王史進、敗れたり」

「――突然、笑い出した。

その狂行に周りで騒いでいたもの達も水をかけたように静まりかえる。

そしてその高笑いの拍子に被っていた外套は子供？の頭から落ち、王健の目にはその中に隠れていた一つの小さな猫耳が飛び込んで来た。

そしてその下で心底腹黒そうな笑みを浮かべている顔に、王健はひどく見覚えがある。

忘れるはずがない、小さい頃まで、同じ私塾で学び、半年前までは同じ主の元で働いていたそいつは、なんらかわりない姿で王健の前にいた。

その者の名は苟？、字は文若。

後に王佐の才とまで称えられるほどの英傑。本来ならこんな所へと来るわけがない者だ。

「ぶ、ぶ、文若！？なんでここにいるんだ?!！」

動転しながら叫ぶ、王健の声は、静まりかえった店内に大々的に響き、前にいる苟文若はそれをみてもう一度高らかに笑う。

そんな二人に理解が追いつかない周りは呆然と二人を見て、店内は少しの間異様な雰囲気にも包まれたのだった。

序章(三)(後書き)

誤字報告あれば是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3068z/>

三国志放浪記～守成の才～

2011年12月17日23時51分発行